The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	銀雀山漢墓竹簡「兵之恒失」考釈
Author(s)	金城, 未来
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2010, 44, p. 35-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9116
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

銀雀山漢墓竹簡「兵之恒失」考釈

金城未来

はじめに

一九七二年、山東省臨沂（りんぎ）県の銀雀山漢墓から約五千枚の竹簡が出土した。[1] そこには『孫子兵法』『孫臏兵法』『六韜』『尉繚子』『晏子』など先秦時代の古書および前漢武帝期の『元光元年暦譜』が含まれていた。

その後、銀雀山漢墓竹簡は整理・釈読作業が進められ、一九七五年には一部の文献の釈文が公開された。[2] また、一九八五年には再びそれらを整理し編集し直した『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』[3]（銀雀山漢墓竹簡整理小組編、文物出版社、九月）や、未整理の状態ではあるものの全竹簡の釈文を掲載した呉九龍『銀雀山漢簡釈文』（文物出版社、一二月）が刊行された。この状況を受けて、とりわけ『孫子兵法』や『孫臏兵法』に関する検討が進められ、中国古代兵学研究において一定の成果を収めることとなったのである。

そして二〇一〇年一月、第一輯の刊行から二五年の歳月を経て、ついに『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』（文物出版社）が出版された。本稿ではこの『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』に所収の文献「兵之恒失」を取り上げて検討を試みたい。

なお、「兵之恒失」は一九七五年段階では、『孫臏兵法』下編中の一篇「兵失」として発表されていた文献である。[4] しかしその後、篇題木牘の発見により『孫臏兵法』から除外され、「論政論兵之類」五〇篇中の一篇「兵之恒失」として再編された。

本稿ではまず、「兵之恒失」の内容を理解するために、正確な釈文の作成を第一の目的とする。次いで、その釈文を基に、本篇の文献的性格や思想的特質について考察することを第二の目的としたい。

一．「兵之恒失」の全体構成

本章では、「兵之恒失」がどのような文献であるかを把握するため、まず先行研究と書誌情報とを示す。次いで「兵之恒失」の釈読を行い、その排列について注意すべき点を指摘する。

先行研究

先述のとおり「兵之恒失」は以前、『孫臏兵法』の一篇である「兵失」として公開されていた。『孫臏兵法』「兵失」の先行研究（訳注）には、以下の文献がある。

・銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡 孫臏兵法』（文物出版社、一九七五年、二月）

・金谷治訳注『銀雀山漢墓竹簡 孫臏兵法』（東方書店、一九七六年、七月）

・張震澤『孫臏兵法校理』（中華書局、一九八四年、一月）

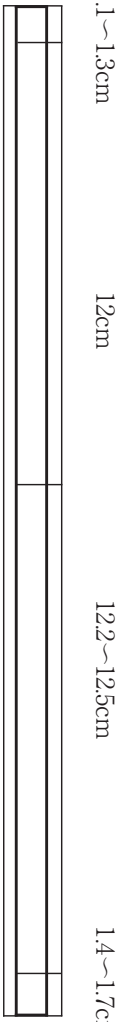
・鄧沢宗『孫臏兵法注釈』（解放軍出版社、一九八六年、三月）

なお、本稿執筆の時点では、『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』に再編された「兵之恒失」を中心に取り上げ、検討を試み

た研究はいまだ見られない。そのため、ここでは「兵失」の訳注や通釈を参考に、以下「兵之恒失」の釈文および内容の検討を進めることとする。

書誌情報

銀雀山漢墓竹簡整理小組が原釈文を作成。第一簡表面上部に篇題「兵之恒失」が記されている。竹簡は接続不明の残欠簡も含め全一五簡。簡長は約二七センチ（漢代の約一尺二寸）。簡幅は〇・五～〇・九センチ、厚さは〇・一センチである。編綫は三道、簡端は平斉。完簡には二八～二九字が記されている。その状況を図示すると次のようになる。[5]



（一）釈読

次に、原釈文と先行研究とを考慮し、筆者の考察を加えて「兵之恒失」の釈読を行う。

凡例

・「釈文」は旧字体を使用し、「訓読」以下は適宜常用字体に改めた。

・【　】は竹簡番号を、〓は重文記号を示す。また、□は判読不明の文字を、……は竹簡の残欠により数文字分接

続不明の文字があることを示す。

・「　」は竹簡の残欠部分を文意により補った箇所を表す。また（　）は語句の解説を、〔　〕は文意を明確にするため補足した箇所を示す。なお、「・」は竹簡上部に付された文頭記号を表している。

・点線部は、「兵之恒失」の一部と考えられる接続不明の残欠簡を表す。

釈文

兵之恒［失］[語注(1)]【01】

・兵之恒失、政爲民之所不安爲……【02】

・欲以敵國之民之所不安、正俗所……之兵也。欲以國［兵【03】之所短］、難敵國兵之所長、耗兵也。欲强多國之所寡、以應敵國之所多、速詘[語注(2)]（屈）【04】之兵也。備固、不能難敵之器用、陵兵也。器用不利、敵之備固、挫兵也。兵不【05】稱、内疲之兵也。多費不固□……【06】……［兵不能］長百功、不能大者也。兵不能昌大功、不知會者也。兵失民、不知過者【07】也。兵用力多功少、不知時者也。兵不能勝大患、不能合民心者也。兵多悔、信【08】疑者也。兵不能見禍福於未形、不知備者也。兵見善而怠、時至而疑、去非而【09】處邪、是〻而弗能居、不能斷者也。……【10】使天下利其勝者也[語注(3)]【11】。

……□兵不能【12】

……□者也、善陣、知背嚮、知地形【13】、而兵數困、不明於國勝兵勝者也。民不志、衆易敝……【14】

……司利、兵之勝理不見、敵難服、兵尚淫天地【15】

訓読

兵の恒［失］【01】

・兵の恒失は、政、民の安んぜざる所を為(おさ)め、為……【02】

・敵国の民の安んぜざる所を以て、俗の……する所を正さんと欲するは、……の兵なり。国［兵【03】の短なる所］を以て、敵国の兵の長ずる所を難ぜんと欲するは、耗兵なり。強いて国の寡き所を多しとして、以て敵国の多き所に応ぜんと欲するは、速詘【04】の兵なり。備え固けれど、敵の器用を難(はば)むことあたわざるは、陵兵なり。[語注(5)] 器用 利ならざるに、敵の備え固きは、挫兵なり。兵【05】称(かな)わざるは、内疲の兵なり。費すこと多けれど、□を固くせず……【06】……［兵］百功を長ずること［能わざるは］、大なること能わざる者なり。兵 大功を昌んにすること能わざるは、[語注(6)] 会を知らざる者なり。兵 民を失うは、過ちを知らざる者【07】なり。兵 力を用いること多けれど功 少きは、時を知らざる者なり。兵 大患に勝つこと能わざるは、民心を合すること能わざる者なり。兵 悔ゆること多きは、疑わしきを信ずる【08】者なり。[語注(7)] 兵 禍福を未だ形(あらわ)れざるに見る能わざるは、[語注(8)] 備えを知らざる者なり。兵 善を見れども怠り、時 至れども疑い、非を去れども【09】邪に処り、是を是(ぜ)とすれども居ること能わざるは、断ずること能わざる者なり。[語注(9)]……【10】天下をして其の勝を利せしむる者なり【11】。

……□兵……能わず【12】

……□者なり。陣を善くし、背嚮(つか)を知り、地形を知れども【13】、兵 数しば困するは、国勝・兵勝に明らかならざる者なり。[語注(10)] 民 志さず、衆 敝れ易く……【14】

……司利、兵の勝理 見えず、敵 服すること難く、兵 尚お天地を淫し【15】

現代語訳

兵の恒失（兵が必ず失敗してしまう原因）

・兵が必ず失敗してしまう原因は、政治を行うのに民が安心できないことをし、……

・敵国の民が不安に思うことによって、世間一般の……することを正そうとするのは、……の兵である。国〔兵の短所〕によって、敵国の兵の優れた所を阻もうとするのは、耗兵（薄弱な兵）である。無理に国のまばらで脆弱な所を充実したように〔見せかけ〕て、そうして敵国の充実した所に対抗しようとするのは、速屈の兵（すぐに行き詰まる兵）である。防備は堅固であるが、敵の兵器を攻めることができないのは、陵兵（侮られる兵）である。進攻の兵器が鋭利でないにも関わらず、敵の備えが堅固であるのは、挫兵（挫折する兵）である。兵が〔事の軽重を〕計れないのは、内疲の兵（疲弊する兵）である。浪費することは多いが、□を堅固にできない……〔兵〕が多くの功績をさらに伸ばしてゆくことができないのは、長大にはなれないものである。兵が大きな功績をそれ以上盛んにすることができないのは、よい機会を知らないものである。兵が民を失うのは、過ちを知らないものである。兵が〔兵〕力を多く用いたにも関わらず功績が少ないのは、時宜を知らないものである。兵が大きな困難に打ち勝つことができないのは、民心を一つに合わせることができないものである。兵がよく後悔するのは、疑わしいことを信ずるものである。兵が禍福をまだはっきりしない内に予測できないのは、備えを知らないものである。兵が有利な状況を認めながら怠って進まず、よい時宜が巡ってきているにも関わらず〔これを〕疑い、欠点を除いておきながら依然として邪道におり、〔そこに兵がいることが〕良いと認識しても〔そこに〕居ることができないのは、決断力のないものである。……天下全体にその軍事的勝利で恩恵を与えるものである。

……□兵は……できない

……□者である。陣立てに巧みで、布陣の際に向かう所や背にする所を知り、地形〔の優劣〕を知っているにも関わらず、兵が度々困窮するのは、国や兵の勝利に精通していないものである。民が目標を持って行動せず、衆が疲れやすく……

……司利、兵の勝利が見えず、敵は降服することが難しく、兵がなお世界を淫し……

語注

〈1〉整理者（銀雀山漢墓竹簡整理小組）によれば、この篇題は、『銀雀山漢墓竹簡〔叁〕』所収予定の篇題木牘にも見えるという。篇題木牘および第二簡冒頭部から「失」字を補った。

〈2〉整理者は、「屈」を「尽」と読むべきであろうとしている。整理者が「尽」と釈読する理由は不明であるが、張震澤『孫臏兵法校理』（中華書局、一九八四年）では、「詘」を「屈」と通ずるとした上で、『管子』国蓄篇に「出二孔者、其兵不詘」とあり、その房玄齢注に「詘、窮也」とあることから、「詘」を「窮」の意とする。ここでは張震澤氏の意見に従う。

〈3〉第一一簡の下部は文字がなく留白となっている。そのため、この簡が末簡であった可能性がある。

〈4〉「備固、不能難敵器用」について整理者は、防御は堅固であるが、敵の兵器に対抗することができない意とする。あるいは、この句の「備」字の下には「不」字が脱落している可能性があると述べる。

〈5〉「陵兵」とは、相手に侮られる軍隊の意。『尉繚子』攻権篇に「疾陵之兵」とある。

〈6〉『逸周書』王佩篇に「昌大在自克」とある。

〈7〉整理者は、「兵失民、不知過者也」より以下の一段が次に引く『逸周書』王佩篇の内容と一致すると述べる。「安民在知過、用兵在知時、勝大患在合人心、殃毒[6]在信疑」。また、『尉繚子』十二陵篇に「悔在於任疑」とあることを指摘する。

〈8〉『逸周書』王佩篇に「見禍在未形」とある。

〈9〉『逸周書』王佩篇に「見善而怠、時至而疑、亡正処邪。是弗能居。此得失之方也。不可不察」とある。

〈10〉「背嚮」とは、行軍や布陣の際に向かう所、あるいは背にする所を指す。整理者は、『尉繚子』天官篇に「世之所謂刑徳者、天官・時日・陰陽・向背者也……故按刑徳『天官』之陣曰、〝背水陣者為絶地。向阪陣者為廃軍〟」とあることを指摘する。[7]また、『淮南子』兵略訓に「明於星辰日月之運、刑徳奇賅之数、背嚮左右之便、此戦之助也」とあり、『韓非子』飾邪篇に「初時者、魏数年東嚮攻尽陶・衛、数年西嚮以失其国。此非豊隆・五行・太一・王相・摂提・六神・五括・天河・殷槍・歳星非数年在西也、又非天欠・弧逆・刑星・熒惑・奎・台非数年在東也。故曰……左右背嚮不足以専戦」とあることを記す。

他に、『孫子』軍争篇に「故用兵之法、高陵勿向、背丘勿逆」とあり、行軍篇に「平陸処易而右背高」とある。また、『司馬法』用衆篇に「凡戦、背風背高、右高左険」とある。

(二) 竹簡の排列について

「兵失」は「兵之恒失」として改編されるにあたり、竹簡の排列に変更が見られた箇所がある。ここでは、排列にどのような変更がなされたかについて検討する。

まずは、「兵失」と「兵之恒失」との排列の相違を次に示す。

【「兵失」より削除された箇所】

・「……明者也。」（『孫臏兵法』文物出版社、一九七五年二月、一〇四頁五行）

・「止道也。貪而廉、龍而敬、弱而強、柔而〔剛〕、起道也。行止道者、天地弗能興也。行起道者、天地……」（同、一〇四頁一一行～一〇五頁一行）

【「兵之恒失」への挿入および変更箇所】

・「兵之恒失、政為民之所不安為……」（第二簡）

・「……之兵也。欲以国〔兵之所短〕」（第三～四簡）

・「称、内疲之兵也。多費不固□……〔兵不能〕長百功、不能大者也。」（第六～七簡）

・「処邪、是■而」（第一〇簡）

・「善陣、知背嚮、知地形、而兵数因、不明於国勝兵勝者也。民不志、衆易敝……」（第一三～一四簡）

・「……司利、兵之勝理不見、敵難服、兵尚淫天地……」（第一五簡）

　部は「兵失」において前後の接続が不明とされていた竹簡が、「兵之恒失」では本文に組み込まれたものを表し、二重傍線部は、逆にはじめ「兵失」本文に位置付けられていた竹簡が、「兵之恒失」では接続不明簡として取り扱われているものを示している。

「兵失」「兵之恒失」の両者を比較すると、一見して「兵之恒失」本文に、「兵之恒失～」や「～之兵也」といった「兵」に関する記述が追加されたことが分かる。本文献の篇題や本文献が兵の敗因について列挙する形式で記されていることからも、「兵之恒失」本文にこれらの竹簡が編入されたことは、何ら不自然ではないように思われる。

また、両者を比較すると、「兵失」で述べられていた「止道」や「起道」に関する傍線部の内容が、「兵之恒失」からは削除されたことも窺える。「兵失」では、傍線部は「兵善を見れども怠り、時至れども疑い、非を去れども居ること能わず[8]」という文脈に接続しており、これは『六韜』文韜・明伝篇に「太公曰く〝善を見れども怠り、時至れども疑い、非を知れども処る。此の三者は道の止まる所なり[9]〟」とあることと類似する。そのため、ここから従来、「兵失」には「兵の敗因を分析し、軍事行動では止道（停滞し滅亡する道）を避け、起道（興旺し勝利する道）を行うべきであると主張する内容」が記されていると考えられてきた。

しかし、前章の語注〈9〉に示した通り、『逸周書』王佩篇に「善を見れども怠り、時至れども疑い、正を亡くし邪に処す。是なるも居ること能わず。此失を得るの方なり。察せざるべからず」とあることや、本篇においては「兵～〇〇者也」という句形が多用されていることから、「兵之恒失」において「兵善を見れども怠り、時至れども疑い、非を去れども邪に処り、是を是とすれども居ること能わざるは、断ずること能わざる者なり」（第九～一〇簡）と再編されたことは、非常に的を射たものであることが分かる。

なお、新たに「兵之恒失」に加えられた波線部は、残欠簡であり接続が不明である。これらは今後、より詳細な検討を要すると思われるが、その他の箇所に関しては以上で述べてきた通り、「兵之恒失」の排列が「兵失」時の排列に比べ、より妥当な形へと改められたということができるだろう。

二．「兵之恒失」の文献的性格

本章では、「兵之恒失」の文献的性格について、構成・重要語句・思想面から三節に分けて分析を加える。

（一）文体・構成について

本節では、「兵之恒失」の文体および構成に着目して検討する。まず、「兵之恒失」の文体に注目すると、兵の敗因が「～するは○○の兵なり」や「兵が～するは、○○者なり」という一定の形式で列挙されていることに気づく。戦闘に関する内容をこのように箇条書き形式で記す文献には、他に『孫子』謀攻篇[10]や『孫臏兵法』篡卒篇[11]などがあり、「兵之恒失」がこれらと類似する文章形式を持つものであったことが窺える。

次に構成に着目すると、「兵之恒失」では、「耗兵」や「挫兵」など戦闘において敗北を招く兵が列挙されており、篇全体を通して自戒的内容となっていることが分かる。これは、同じ文章形式を持つ『孫子』が「○○者は勝つ」というように勝利を得るための方策を記し、また『孫臏兵法』が「恒に勝つに五有り。○○は勝つ……」や「恒に勝たざるに五有り。○○は勝たず……」というように戦闘における勝敗の両因を記していることと異なる。このように、勝因に触れず敗因のみを列挙する「兵之恒失」の記述には、『孫子』や『孫臏兵法』と比べ、より緊迫した戦闘状況や切実な訓戒意識が反映されていたと推測することができるだろう。

（二）「兵之恒失」における「天下」

本節では、「兵之恒失」における重要語句「天下」を取り上げて考察したい。「兵之恒失」中には、第一一簡の「……天下をして其の勝を利せしむる者なり」という箇所に「天下」の語が登場しており、これは、「……天下全体に戦闘の勝利によって恩恵を施す者である」という意であると考えられる。ここから本文献が、天下全体の統治を視野に入れて著述されたものであることが窺える。

では、他の兵家の文献において「天下」はどのように記されているのか。

まず『孫子』には、「故に善く兵を用いる者は、人の兵を屈して戰うに非ざるなり。人の城を抜きて攻むるに非ざるなり。人の国を毀ちて久しきに非ざるなり。必ず全きを以て天下に争う」[12]（謀攻篇）とあり、これは「善く戦う者は、必ず〔敵の兵力や国力を〕保全したまま天下に争う」という意であると考えられる。ここでは「天下」が全土の統一や獲得を視野に入れた言葉ではなく、争いが展開される場所を表現したものにすぎないことが窺える。[13]

次に、『孫子』よりも時代の下る『孫臏兵法』や『呉子』に注目すると、天下の語句が「戦い勝ちて強立ち、故に天下服す」（『孫臏兵法』見威王篇）や「数しば勝ちて、天下を得る者は稀にして、以て亡ぶ者は衆し」[14]（『呉子』図国篇）と記述されている。両文献の内容は、「戦いに勝ち、強者が立つので、全土が服従する」「しばしば戦い勝って全土を統治できるのはまれなことである」という意であると思われる。また、『尉繚子』にも「国車は閫より出でず、組甲は槖より出でずして、天下を威服す」（兵教下篇）とあり、「兵力を使わずに天下全土を服従させる」ことが説かれており、『孫臏兵法』や『呉子』同様、天下統一を視野に入れたと思われる記述となっている。

残念ながら、「兵之恒失」中に見える「天下」に関しては、竹簡の上部が欠損しており全体の文意は不明である。そのため厳密な比較や本文献の明確な位置付けは難しいが、下部の「天下をして其の勝を利せしむる者なり」という表現には、単に戦場としての「天下」というよりは、寧ろ『孫臏兵法』や『呉子』『尉繚子』の如き天下統治の意を秘めた「天下」を窺うことができると言えるだろう。

（三）「兵之恒失」に見える合理性

最後に、「兵之恒失」の思想的特質について検討する。まず、「兵之恒失」の特徴として、時宜や禍福を迅速かつ的確に察知する先見の明が重要視されていることが挙げられる。具体的には、「兵力を用いること多ければ功少き

は、時を知らざる者なり」（第八簡）や「兵禍福を未だ形（あらわ）れざるに見る能わざるは、備えを知らざる者なり」（第九簡）とあるのがそれに該当する。これは、『孫子』計篇に見える「廟算」（開戦前の情報分析）や『孫臏兵法』篡卒篇に見える「敵を糧（はか）り険を計れば勝つ」[15]という考え方と類似するものであると思われる。

また、本文献には「陣を善くし、背嚮を知り、地形を知れども、兵数しば困するは、国勝・兵勝に明らかならざる者なり」（第一三～一四簡）と布陣や地形の優劣に言及する記述があることにも注目できる。ここでは、文脈上、陣や背嚮、地形の優劣を理解することが、勝利獲得のための初歩的要素として肯定的に認識されていたものと理解できる。この点に関しても、『孫子』に「故に兵を用いるの法、高陵に向う勿れ、丘を背するに逆（むか）う勿れ」[16]（軍争篇）や、「平陸には易きに処りて高きを右背にす」[17]（行軍篇）という「兵之恒失」と同様の表現が見える。

このように「兵之恒失」が戦闘前の情報分析の重要性や、地形を戦闘に積極的に利用することを説く点には、『孫子』や『孫臏兵法』のごとき兵権謀家的合理思想を窺うことができる。

おわりに

以上、本稿においては、「兵之恒失」を取り上げて検討を試みてきた。その結果、「兵之恒失」は『孫臏兵法』から除外され、新たに「論政論兵之類」として再編されたが、本文献の性格は『孫臏兵法』と非常に近く、強い関連性をもつものであったことが明確となった。「兵之恒失」と同一の篇題木牘には、「将敗」や「将失」など他にも一一篇の文献名が見えると指摘されている。今後は同一木牘に篇題が記されたそれら一二篇の関連性や思想的特質にも目を向けるとともに、さらには類似した内容を持つ「論政論兵之類」五〇篇へと視野を広げて検討してゆく必

要があるだろう。

注

（1）これらは銀雀山漢墓竹簡と称される。その出土状況については、山東省博物館臨沂文物組「山東臨沂西漢墓発現「孫子兵法」和「孫臏兵法」等竹簡的簡報」（『文物』、文物出版社、一九七四年第二期所収）に詳しい。

（2）一九七五年に刊行された釈文を掲載する文献には、『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕孫子兵法・孫臏兵法』（銀雀山漢墓竹簡整理小組編、文物出版社、七月）及び『孫臏兵法』（銀雀山漢墓竹簡整理小組、文物出版社、二月）がある。

（3）『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』には、『孫子兵法』『孫臏兵法』『尉繚子』『晏子』『六韜』『守法守令等十三篇』が収録される。なお、竹簡の釈文と図版とを掲載する『銀雀山漢墓竹簡』は〔壹〕～〔叁〕の全三冊が刊行される予定である（現在、第二輯まで刊行済み）。

（4）「兵失」という篇題は、整理者（銀雀山漢墓竹簡整理小組）によってつけられた仮題である。

（5）図は「兵之恒失」中、完整簡である第五簡、第八簡、第九簡、第一一簡を参考に作成した。

（6）整理者は「殃毒」に「此二字有誤、拠簡文、以当作〝多悔〟」と注している。

（7）整理者は『尉繚子』天官篇の引用を『群書治要』巻三七によっており、この引用と今本『尉繚子』の該当箇所とには相異があるとしている。今本『尉繚子』天官篇には「非所謂天官・時日・陰陽・向背也……案『天官』曰〝背水陣為絶地、向阪陣為廃軍〟」とある。

（8）原文は以下の通り。「兵見善而怠、時至而疑、去非而弗能居。」

（9）原文は以下の通り。「太公曰〝見善而怠、時至而疑、知非而処。此三者道之所止也〟。」

（10）原文は以下の通り。「故知勝者有五。知可以戦与不可以戦者勝。識衆寡之用者勝。上下同欲者勝。以虞待不虞者勝。将能而君不御者勝。此五者知勝之道也。」

（11）原文は以下の通り。「孫子曰、恒勝有五。得主専制勝。知道勝。得衆勝。左右和勝。糧敵計険勝。孫子曰、恒不勝有五。御将不勝。不知道不勝。乖将不勝。不用間不勝。不得衆不勝。」

（12）原文は以下の通り。「故善用兵者、屈人之兵而非戦也。拔人之城而非攻也。毀人之国而非久也。必以全争于天下。」

（13）これに関しては、湯浅邦弘『中国古代軍事思想史の研究』（研文出版、一九九九年一〇月）に詳しい。

（14）原文は以下の通り。「戦勝而強立、故天下服矣。」（『孫臏兵法』見威王篇）、「数勝、得天下者稀、以亡者衆。」（『呉子』図国篇）

（15）注（11）を参照。

（16）「一．「兵之恒失」釈読」の語注〈10〉を参照。

（17）「一．「兵之恒失」釈読」の語注〈10〉を参照。

［付記］本稿は、平成二二年度懐徳堂研究出版助成金による研究成果の一部である。

（大学院博士後期課程学生）

摘　要

銀雀山漢墓竹簡“兵之恒失”考釋

金城 未來

本文在釋讀收錄於《銀雀山漢墓竹簡〔貳〕》(文物出版社、2010 年 1 月)的文獻“兵之恒失”的基礎上，進一步分析其作爲文獻資料所具有的特質。

在銀雀山漢墓竹簡出土後不久，截止到 1975 年，“兵之恒失”都是作爲《孫臏兵法》下編的一部分發表。但此後，由于遵循篇題木牘“兵之恒失”被排除在《孫臏兵法》之外，重新組編到“論政論兵之類”中。

筆者首先要指出的是，“兵之恒失”所採用的分項列舉的簡明記述方式與《孫子》與《孫臏兵法》的記述方式是極爲類似的。

而且，“兵之恒失”與《孫子》、《孫臏兵法》的相同之處還在於它也論述了迅速察知時機禍福、以及巧妙利用地形等方面的重要性。可以說，這些都屬於不依靠巫術而是重視人事的兵権謀家性質的思想。

特別值得注意的是，在對“天下”的認識上，“兵之恒失”與視天下爲戰鬥場所的《孫子》不同，它與《孫臏兵法》、《吳子》等相同，認爲天下是應加以統治的對象。由此可以推測它是在戰爭大規模化的戰亂時期產生并被應用於實踐的文獻。

雖然“兵之恒失”被排除在《孫臏兵法》之外重編到“論政論兵之類”，但通過以上的分析我們可以發現，“兵之恒失”與《孫臏兵法》在思想上是很接近的，二者之間具有較彊的關聯性。今後有必要在更廣闊的研究視野下把握二者，特別是結合其它的古逸書進行更進一步考證。

キーワード：銀雀山漢墓竹簡，『孫臏兵法』，「兵之恒失」，天下